

## ジョージ・エリオットの小説

### ——主題と手法——

#### 三 「アダム・ビード」

「牧師館物語」から「アダム・ビード」へと読み進んだ時、我々は両者の出来映の、あまりにも大きな差に驚かされ、ジョージ・エリオットはレビューの言う「修業時代の作品」をたったひとつ手がけただけで、すばらしく腕を上げたという印象を抱く。この印象は、両者の間の時間的間隔がほとんどないことを知った時、一層強まる。「牧師館物語」の最後のシーン「ジャネットの後悔」を書き上げたのは一八五七年十月九日であり、「アダム・ビード」を

塩川千尋

書き始めたのは、同じ月の二十二日である。つまり第一作を書き終え、次作に取りかかるのに要した時間は、たった十三日である。言わば第一作を書き上げたペンのぬくもりのさめぬまま、すぐ「アダム・ビード」に取りかかりながら、ジョージ・エリオットは驚くべき進歩を見せている。彼女はこの作品において、複雑な人間心理、社会における人間と人間の複雑なつながりを、きわめて単純なプロットを用いながら、じっくりと描いてゆく。彼女は人物の心理をしっかりと把握し、人物を内側から描いてゆくために、その行動には必然性がある。とりわけアーサーの分析はすばらしく、この作品の大きな魅力のひとつとなっている。プ

ロットは偶然の要素を出来得る限り排除し、情況と性格の絡み合いから論理的に發展してゆく。そしてひとりの人間の行動が、水面に広がる波紋のように、次々と他の人間に影響を及ぼしてゆく様を見事に分析し、動機のいかんにかかわらず結果の非情性を読者の心に強く印象づける。そこに我々は、前作よりもはるかに強烈に、ジョージ・エリオットの哲學的深み、人間心理に対する洞察力の鋭さ、人間社会を広く概観し、かつ深く観察する目を感じる。それはいずれも創作活動に入る前、彼女がすでに持っていたものではあるが、手法を模索した第一作では十分に作品中に生かすことはできなかった。これに対し、「アダム・ビード」では、それにかんがりの手法が伴なっている。勿論、完璧に近しいというわけではなく、後述するようなまづい点をいくつか持つてはいるが、「牧師館物語」に比較すると、題材の扱い方・描き方には目覚ましい進歩がある。

ジョージ・エリオットが短期間にこれ程の手法上の進歩を見せている理由は、一体なんなのだろうか。創作に対する自信だろうか。どうもそうとは思えない。日記や手紙を読む限り、自信にあふれて創作に励むジョージ・エリオットの姿など、一向に我々の心には浮かんでこない。我々が

心に描くことのできる姿は、ルイスの激励と、作品に対する一般の好意的反応に支えられて作品を書いている彼女の姿であり、少しでも批判的な書評が彼女の目に触れないように細心の注意を払っているルイスの姿である。「アダム・ビード」にしても、ルイスに励まされながら、時には快調にペンを走らせたこともあったが(例えば、さまよえるヘテイの描写)、「落胆の発作」に悩まされたことも多かったのである。自信でないとすると、中篇より長篇小説の方が彼女には合っていたという、単純な理由も考えられる。その理由は、所詮、推測の域を出ない。しかし、いずれにせよ、ジョージ・エリオットがデビュー作によって、急速に手法を学び取ったことは事実である。「アダム・ビード」の中には、「牧師館物語」で扱われたことの多くが繰り返されており、題材の新しさはあまり目につかない。その代わり、題材の扱い方に格段の差があるのである。それでは主題部を展開してゆく四人の人物——アダム・ビード、ダイナ・モリス、アーサー・ドニソン、そしてヘティ・ソレル——は後まわしにして、まず外円、つまり物語の背景と副次的人物がどのように描かれているかを見てゆこう。

ジョージ・エリオットは物語の舞台に再び、幼年時代の

思ひ出として心に残る田舎の村を選んでゐる。シェバートンをおぼせるヘイスロープ(Haystope)は、その名の示す通り実り豊かな、緑したたる村である。それはイギリスの田舎に行けばどこにもありそうな村であるが、時間によって濾過された思ひ出は、ヘイスロープを美化し、そこがまるでエデンの園であるかのような印象を与える。通りがかりの「馬上の旅人」の目に映るロウムシャーのヘイスロープは、次のように描かれる。

そして馬を止めた『緑地(The Green)』の脇から、彼はこの快適な土地の典型的な特色を、そのほかすべて一眺することができた。はるか地平線の上には巨大な円錐形の山々が聳え立ち、まるでこの小麦と草の土地を飢えた冷たい北風から守るために立つ巨大な塚のようであった。山は紫の神秘に包まれる程遠くにあるわけではなく、濃い緑色の山腹に羊が点在しているのを見ることができた。その羊の動きは目に見えるものではなく、元の場所に行かないことを知る記憶によって明らかになるだけであった。山は移り行く時間の求愛を毎日のように受けながら、自らは少しも変わらないことよって答えるだけであった——真赤な朝陽や四月の

真昼の軽やかな輝きを受けようと、実りをもたらす夏の陽が、赤々と夕陽を浴びせようと、相変わらずむつりとむずかしい顔をしたままであった。山の真下に目をやると、山腹にかかる森の境目が見え、その所々に放牧地や耕やされた畑が明るく輝やいていた。森はまだ、真夏の緑一色に塗られた葉のカーテンという様子ではなく、若い樫の木の温色や、とねりこ、しなの木の柔らかな緑色を見せていた。森の手前には、さらにうっそうとした谷があった。まるで、胸壁を高く掲げ、木々の間から淡青い夏の煙を上げているのっぽの館を一層強固に守ろうと、森の木が跡に丸坊主の土地を残したまま山腹を駆け降り、谷に集まったかのようであった。館の前に広大な庭園と、大きな池があることは間違いなかったが、起伏する牧草地が、村の『緑地』にいる我らが旅人の視線を遮っていた。その代わり、彼は目の前にそれに負けない程美しいものを見た——水平な夕陽が、羽根のような草のなだらかにたわんだ茎や背の高い赤すいば、生い茂った生け垣に沿って並ぶドクゼリの白い散形花の間で、透き通った金のように光っている光景であった。時は草刈り鎌を砥ぐ

音に、花を散りばめた草が生い茂る牧草地を名残惜しげに見るような夏の瞬間であった。(二章)

この楽園のようなヘイスロープを見渡す「馬上の旅人」は、ここに来る前、ロウムシャーと隣接しながら対照的に不毛なストニシャー(Stonyshe)を通じてきたばかりである。こうして作者は自然の恩恵を存分に受けるヘイスロープを描きながら、同時に、この世では常に明と暗が同居していることを早くも暗示する。そしてこの明と暗の対照、陰と陽の交錯は、物語の構成、人物設定、個々の場面の描写などにも多く見られ、この作品の大きな特徴のひとつもなっている。この点については、後で再び触れることにする。

「エイモス・バートン」「ジャネットの後悔」の中で見せた外円の描写力は、「アダム・ビード」では一段と磨きがかけられ、中景にいる人物は勿論、中心から遠くはずれ、読者の視野にチラチラとしか入ってこない人物のほとんどまでも生き生きと描かれる。我々はこうした人物の描写を支えるものが何であるかを、「物語の小休止」と題した十七章ではっきり知ることができるので、個々の人物を検討する前に、その点について述べてみたい。作者はまず、あ

まりにも世俗的なアーウィン牧師に不満を抱く読者を想定し、こう答える。

でも、たまたま、それとは逆に、私はそのような独善的な描写を避け、人物や物事を私の心の鏡に映った通り忠実に描くことに最大の努力を払っている。明らか

にその鏡には傷がついており、時には輪郭が歪み、映像がぼやけたり乱れたりすることがある。しかし、私はその映像がどのようなものであるかを、力の及ぶ限り正確に——ちょうど宣誓した上で証人席に立ち、自分が経験したことを話しているように——読者に話さなければいけないと感じている。

「エイモス・バートン」の中で掲げたリアリズム宣言の繰り返しであるが、ここではジョージ・エリオットはさらに詳しく創作上の信念を述べている。彼女はその架空の読者に、小説は現実には存在しない、優雅で単純化された世界を描き、善玉と悪玉の区別がはっきりした人物描写をすべきだと主張させる。その上で彼女は、こういう読者に迎合する「賢い小説家」は、読者から平凡な人間に対する共感を奪うという有害な影響を及ぼしていることを指摘する。そして自分は大抵ただひたすら虚偽だけを恐れ、真実をあ

るがままに描くと断言する。

ジョージ・エリオットがオランダ派の絵画をことさら好んだのは当然である。華麗な生活でもなければ極貧の生活を描くのもなく、あくまでも大多数の人間の単調にしてありふれた生活を忠実に描くオランダ派の絵画こそ、彼女の創作上の手本であったと言える。彼女は次のような、田舎の結婚式を描いた絵を例に掲げる。茶色の壁に囲まれた部屋の中で花婿がぎこちない手つきで花嫁とダンスを始めようとしている——その花嫁は怒り肩で丸顔だ——二人を中年、老年の友人や知人が見守っているが、とても端整とは言いがたい。彼らの顔には紛れもなく満足と善意の表情が浮かんでいる。こういう情景は、まさしくジョージ・エリオットがこの作品の中で描いている情景である。彼女はこの世界の大部分を占めている平凡な人間に、深い愛情と敬意を抱いている。彼女が副次的人物に生命を吹き込むことに成功しているのは、単に些細な事柄を見逃がさない鋭い観察力や人間性に対する洞察力を持っていたからではなく、そうしたものの背後に愛する心、共感する暖かい心があったからである。

ヘイスロープの夜学で教える老教師バートル・マッシュイ

は気の短い男で生徒には厳しい。ところが最も遅れた三人の生徒——と言っても、もう大人だが——には驚くほどの暖かい忍耐力を示す。三人はそれぞれ異なった動機から読み書きを習う必要を感じて村の夜学に通い始める。二十四になるビルは、いとこのトムや自分よりはるかに体力の劣る仕事仲間のサムに対する対抗意識から、ブリムストンはメンディズムにかぶれ、聖書を独力で読めるようになりたくて三十にして文字の勉強を始める。もう一人は染屋で、文字の知識を金もうけにつなげたいという欲得から夜学に通う。こうして性格も動機も異なる三人ではあるが、学問が思いのほか難しいことを身をもって知る点においては共通する。この三人が初歩的な文字の学習に苦勞する姿を、ジョージ・エリオットは次のように描く。

つらい仕事をしていることがひと目で分かるこの三人の男が、いっしんに、すり切れた本の上にかがみ込み、「芝生は緑だ」「薪は乾いている」「麦が実っている」と苦しげになんとか読もうとしている姿はいじらしくかった——それは頭文字以外はどれも同じように見える単語の羅列を学んでから入る大変難しい授業であった。その姿はまるで三匹の荒々しい獣が、どうした

ら人間になれるかを学ぼうと、つたない努力をしていくかのようであった。そしてそれはバートル・マッシーの心の琴線に触れた。それと言うのも、この教師は彼らのような一人前の子供に対してだけは、けっして辛辣な形容詞を使ったり怒鳴ったりすることはなかった。彼が何事にも動じない落着きを授かっていたわけではない。音楽の授業のある晩になると、彼にとつて忍耐はけっして楽な美德でないことが明らかになるのであった。しかしこの晩はd、r、yという文字を前にして、絶望的な空白感を抱きながら首をひねっているビル・ダウンズを眼鏡越しに見ている彼の目は、ビルを精一杯励ますような、大変やさしい光にあふれていた。(二十一章)

この三人に対してバートル・マッシーが見せるやさしい心は、平凡な人間に共感を寄せ、彼らの人知れぬ努力に敬意を抱く作者自身の心でもある。このような心を持っていたからこそ、ジョージ・エリオットは副次的人物の描写に見事な成功を収めることができたのだ。

脇役の中でもアーウィン牧師はミセス・ポイザーに次いで我々の印象に残る人物だ。彼は「エイモス・バートン」

に姿を見せたマーチン・クリーブスや「ギルフィル氏の恋物語」の主人公を思わせる牧師、つまり作者自身の宗教観を具体化する牧師である。世俗的趣好を持ち、どこことなく貴族的な雰囲気漂わせるアーウィンは、およそ禁欲的とは言いがたい生活を送る。彼には高邁な理想や神学に対する情熱はない。しかし、彼には広い寛大な心がある。はた目には熱心な牧師とは映らないこのアーウィンを、メソディストのウィル・マスカリーは「ぐうたら牧師」と呼ぶが、アーウィンは腹を立てることもない。それどころか、彼はウィル・マスカリーを人間的に進歩させたメソディズムの功績に目を向けることを忘れない。ウィルが悪口を言っていることを告げ口に来た教会の役員ジョシュア・ランに向かつて、アーウィンはこう述べる。

「悪口なんか、聞いたその場で忘れなさい。ウィル・マスカリーは今よりずっと悪くなっているもおかしくない奴なんだ。噂じゃあ昔は仕事はさぼる、女房はぶんなぐるで手に負えない飲んだくれの悪党だったそうだよ。それが今では始末にして、人並みに暮しているんだ。女房といっしょに気楽にやってみたいじゃないか。」(五章)

アーウィンは宗教に限らず、すべてのことにおいて個人の意志を尊重し、人それぞれの生き方を認める。したがって、国教の牧師でありながら、自分の教区でメソディズムを説くダイナに敵意を抱くこともない。この二人が仲良く話しを交わす八章は、宗教を客観的に見つめるジョージ・エリオットだからこそ描くことができたと言っても過言ではない。彼女はダイナこそ理想化しているが、メソディズムに対しては冷静な目を保ち続ける。ジャネットを救ったのは福音主義でなく、トライアン個人であったように、この作品においても、独房に入れられ、頑なに心を閉ざすヘティに罪を告白させるのはダイナの説くメソディズムではなく、彼女の心である。ダイナはメソディストの説教師なら誰でも言いそうな、ごくありふれた言葉でヘティに話しかけ祈るだけである。ヘティは、ダイナが自分とはまったく別世界の人間であることと同時に、他人の苦悩を分かち合う心と、人をけっして咎めることのない、暖かく寛大な心を持つていることを直観的に感じ取っていた。だからこそ、ダイナに心を開いたのである。ジョージ・エリオットの世界では、人は論理・教義によって救われることはない。苦しむ人間とその人を救う人間との間の絆は心・感情

であり、その絆は言葉ではなく直観によって結ばれる。

ジョージ・エリオットが口先で教義を振り回す牧師を嫌ったことは当然である。彼女に作品の中で「教条主義的 (doctrinal)」と形容された牧師はすべて手厳しい扱いを受けている。彼女にとってその言葉は心の偏狭に通じ、したがって共感の欠如・エゴイズムを意味するからである。我々はそこに単純な偏見ではなく、彼女自信の苦悩に満ちた経験の重みをずっしりと感ずる。晩年のアダムは「若い頃はつきり分ったんですが、宗教は頭の中の考えなんかとは別ものなんです。人に正しいことをさせるのは考えではなく心なんです」(十七章)と述べるが、この言葉は作者自身を代弁しており、アーウィン牧師の描写を支える根本精神である。アーウィンの中にはキリスト教と訣別し、心の抛り所を求めてシュトラウス、ホイエルバッハを翻訳し、コントの実証哲学などを漁ったジョージ・エリオット自身の姿が明瞭に認められる。アーウィン牧師が作者の偏愛を受けるのは当然であり、読者はそのことを

振り向いた顔が、冬に突然吹く暖かい風や寒々とした暗闇の中で赤々と燃える炉火のように、心あたたま印象を与える人がいるものだが、アーウィン氏はま

さにそういう人であった。(五章)

と彼の外見を描写する冒頭からはっきりと感じ取る。アーウィン牧師は魅力的な人物として描かれ、特に彼の家族愛、隣人愛は読者の心を強く引きつける。初老を迎えながら今だに独身であるが、それは母とオールドミスの二人の妹を養うために自分を犠牲にした結果である。しかし彼はそのことにこだわることもなく、自分のやめ暮しをあっさりと言談の種にしてしまう。

作者はアーウィンの家族愛を強調するために、この二人の妹をきわめて平凡な女性として描く。彼以外の人間には、アンとケイトはこの世における余分な存在であり、なんの印象を与えることもなく人生というキャンバスを賑わすだけの人間として映る。作者は二人が独身でいることに對し、青春時代の失恋の痛手というようなロマンティックな理由を与えず、ただ誰からも求愛されなかったために売れ残ったと味気ない説明を加えるだけである。このなんの取り柄もない、しかも一方は病弱な妹にやさしい心使いを見せるアーウィンの姿は、ヘイスロープの村人の目にこそ付かないが、読者には印象的である。

しかし彼の魅力を強調しようとするあまりジョージ・エ

リオットは拙劣な面を見せてしまう。彼女は十七章で晩年のアダム・ビードを登場させ、アーウィンの死後、ヘイスロープにやってきたライドという牧師について語らせる。この典型的な教条主義的牧師であるライドは、エイモス・パートンの二番煎じであり、すべての面においてアーウィンとは正反対の人物である。こういう人物設定はあまりにも作爲的であり、作者の意図を見え透いたものにしてしまう。その結果、作者の狙いとは裏腹に、読者に対する説得力を弱めてしまう。<sup>3)</sup>

ジョアン・ベネットは、この作品には全体の印象を損ねるほど教訓的なエッセイ、つまり物語の道徳的な意味に関する作者自身の解説が多すぎるし、長すぎると述べ、晩年のアダム・ビードを登場させる十七章をその最もひどい例に掲げている。<sup>4)</sup>この章でジョージ・エリオットはアーウィンにかこつけ、自らの小説論を展開し、再び話題を彼に戻すと今度は自らを聞き手にしながら、今は年老いたアダムにアーウィンが牧師としていかに優れていたかを回想させる。ベネットの言う通り、確かにこの章における作者の登場は目障りであるという感を免れない。<sup>3)</sup>とくにアーウィンに対する偏愛を露骨に告白する一節は、読者に彼の人間的



魅力を押しつけているという印象を与える。ベネットはこの「説明のしすぎ」を、ジョージ・エリオット自身の創作力と、読者の理解力に対する不信の結果と捉える。しかし作者の解説には別の意味があるのではないだろうか。ジョージ・エリオットは小説の倫理的使命、小説家の社会的責任を自覚し、その重さに苦しんだ作家である。彼女は小説を書くに当たっては、常に道徳的、教訓的意図を持っており、人物の心理・状況を克明に分析し、それらの意味を解説することによって読者の理解を深めようとする。つまり作者の解説は読者の反応に指針を与えるという啓蒙的な意図に基づいていると解すべきであろう。

この解説、説明が時には十七章のように露骨になり、物語からまったく離れてしまうことがあるのは事実であるが、だからと言ってベネットが指摘するようにアーウィンは生きていないとは言えない。作者の偏愛を受けながらも彼は決してトリアンのように理想化されてはいない。彼はあくまでも人間的なレベルで捉えられている。他人の秘密に立ち入らないという、本来なら美德として扱われるべき彼の特長は、逆にアーサーを救えない原因となる。さらにアダムの愛する相手を誤解することにより、彼はヘテ

イトアーサーの悲劇の一因となってしまう。確かに、アーサーに復讐すると言うアダムに、怒りの空しさを思い出させるのは彼の功績であるが、自分の過に対する罰も受けることになる。牧師でありながら、共感に改宗されたアダムに「聖餐」を授けるといふ重要な役割をバートル・マッシーに譲らなくてはならない。ヘティに死刑の判決が下った後、彼は減刑の恩赦を得るべく努力するが、果せない。このようにアーウィンは過つことのある人間として描かれ、しかもそれなりの罰をも受ける。彼は生きていないどころか、實在感ある人物像となっている。作者は彼が登場すると自分も一緒に舞台に現われてしまうが、このことはアーウィン自身の人間的魅力を損うものではない。

ジョージ・エリオットは、アーウィン以外の脇役に対しては、ほとんど解説を加えることはなく、自然な描写と巧みな会話を通して彼らを生き生きと描く。たまにはマアリー・パージのように、ヘイスロープではアダムの結婚相手と目されながら、ただ名前だけが何度か出てくるだけで、一向にその人柄が読者に伝わってこない人物もあるが、これはまれな例外である。この作品に登場する多くの副次的人物は、単に生き生きと描かれるだけでなく、重要な役

割を果している。丹念に細部を積み重ねることによってミルビーの町の雰囲気を的確に読者に伝えたように、ジョージ・エリオットは彼らの描写を通してヘイスロープという田舎の村のイメージをはっきり読者の心に浮かび上がらせる。

ホール農場で働く年寄りのケスター・ベイルはどんな仕事も手がけるし、手がけた仕事は立派にやる。膝が曲がっているために、歩く姿はいつもおじぎをしているようだ。事実、彼は大変敬意に満ちた人間だが、その対象はもっぱら自分の仕事の腕前なのだ。彼はとりわけ干し草積みが得意だ。いくつもの干し草の山を積み終えると、日曜日の朝、晴着を着て自分が積んだ干し草の山を見にやってくる。適当な距離を置き、しかるべき場所からひとつひとつの山を見ながらおじぎをするように歩き回るその姿は、まるで異教徒が祈りを捧げているかのようだ。作者はこのようにケスター・ベイルにとって、仕事は宗教的な意味を持つことを示すことにより、働くことを宗教と見なし、「立派な大工仕事は神の意志」(五十章)と信ずるアダム・ビードのような人間が、ヘイスロープの村に存在することの必然性を暗示する。ケスター・ベイルと同様、ホール農場で

働く大男のベン・ソロウェイは、こっそりポケットに小麦をしのばせることがたびある。主人のマーチン・ポイザーはそれに気付いているが、彼を咎めることもなく雇い続ける。ソロウェイの連中は長年荒れた土地に住み、いつもホール農場で働いてきたからだ。こうして我々は、ヘイスロープの人々が時間の重みを肌で感じ、伝統を重んじて生活していることを知る。

マーチン・ポイザーはドニソンの土地で働く農夫の中心的存在である。朴とつで人の良いこの農夫は、家族にも隣人にもやさしい。しかし仕事となると話は別であり、ルーク・ブリトンのように仕事のイロハも十分に心得ておらず、しかもいい加減な仕事をする人間には「北東の風のように」(十四章)敵しい面を見せる。彼は姪のヘティが女房に叱られればやさしくかばってやるが、ひとたびヘティが家名を汚したとなると、姪に憐みをまったく感じないほどの屈辱感に満たされ、もはやヘイスロープに止まることはできないと思う。彼にとってこのことがどれほどの意味を持つかを知ること、ヘイスロープの精神的風土の理解に直結する。

教会の役員を兼ねる靴屋のジョシュア・ランは、サイア

ス・ビードの死を知らせるべくアーウィン牧師を訪れるが、本題に入る前に長々と関係のない話をする。ことに、ヘイスロープの生活のテンポを読者に教えてくれる。

また村の若い娘ベッシー・クラナージはヘティと同様、外見を飾ることに心を奪われているが、ダイナに虚栄心の愚かさを指摘され、道徳的進歩の兆候を見せる。しかし、ひとたびダイナが村を去るや、たちまち元のベッシーに戻ってしまう。彼女は、毎日曜教会に行くことこそ欠かさないが、本質的には宗教に無関心なヘイスロープの典型であり、ダイナがこの村に与えた影響が、いかにわずかであったかを象徴する。大きな自然の恩恵に浴しているヘイスロープの人々は、信仰心より型式を重んじており、魂の飢えにさいなまされることもない。キリスト教は単に伝統として残っているだけなのだ。だからこそ、ダイナはヘイスロープを去り、ストニチャーのスノーフィールド(Snowfield)へ行くことが自分の使命だと感ずる。

副次的人物のもうひとつの大きな特徴は、この作品のユーモアに貢献していることである。逆に中心人物の共通点はユーモアの欠如である。これは作品の主題の性格上、必然的な結果であると言える。エゴイズムから苦悩を経て共

感に到達する過程を中心テーマとする以上、当然、大きな精神的苦悩をもたらす悲劇が主題部で繰り広げられるために、作者は豊かなユーモアのセンスを持ちながら、主要人物の中ではそれを発揮することができない。したがって作品のユーモアは、もっぱら脇役に託されているのである。<sup>(7)</sup>事実、この作品においても、主人公アダム・ビードは性格的にユーモアを解さない人間だし、ダイナ・モリスはユーモアからはほど遠い存在だ。虚栄心、エゴイズムに固められたヘティ・ソレルはユーモアを解するだけの感受性や知性も与えられていない。アーサー・ドニソンはもっぱら誘惑に負けてゆく心理の分析材料にされ、とてもユーモアどころではない。この作品でユーモアに最も貢献するのは、バートル・マッシーと、そしてミセズ・ポイザーである。

口の悪い年輩の田舎教師バートル・マッシーの特徴は、算数を巧みに比喻の中に生かすことと、若い時のにがい経験から、今は徹底した女嫌いになっていることである。例えば結婚することの愚かさを彼はアダムにこう説明する。

「そんな考えは馬鹿げている——女房が、仕事を持つ男に心の安らぎを与えてくれるというお前の考えに負

けないくらいだ。馬鹿馬鹿しい、ほんとに馬鹿馬鹿しい。結婚なんてものは簡単な足し算より先に進めないような馬鹿共にまかせておけ。単純な足し算さ——馬鹿と馬鹿を足してみる、六年経ったら馬鹿が六人増えるわけだ。みんな揃いも揃って質は同じだからかさの大きい小さいは合計とはなんの関係もないんだ。」

(二十一章)

彼は同じ章でアダムを相手に女性不要論を展開するが、次の言葉は彼の傑作であり、実に愉快だ。

「神様が我々男の伴侶にそんな生き物をお造り下さったなんぞと言わんでくれ。そりゃあ神様はエデンの園にいるアダムの連れにしようとイブをお造りになったかも知れんよ——あそこなら料理を台無しにすることもないし、ペチャクチャしゃべったり、一緒にになって悪さをする相手もいなかったからな。もつとも、機会に恵まれたとたんイブでどんな悪さをしたかは、お前も知ってる通りだ。だが女が男にとってこの世の天恵だなどと言うのは、神を敬わない、聖書に反する考えだ。」

このようにバートル・マッシーはことあるごとに女の愚

かき、無能さに痛烈な言葉を浴びせる。しかしその中には、いつまでも執拗に女を恨んでいるようなにがしがさは微塵も感じられない。それどころか、女という女を嫌うあまり、「雌ぎつね」と名付けた自分の飼い犬にまで罵声を浴びせ、その実、暖かく世話をしてやる姿はきわめてユーモラスである。そして彼の悪口は女性に止まらず、自惚の強いスコットランド人の庭師クレイグにも向けられる。彼はスコットランドの曲を自慢するクレイグを、次のように言ってやりこめる。

「スコットランドの曲だつて、」バートル・マッシーは軽蔑するように言った。「そんなものはもう二度と聞かなくてもいい程たっぶり聞かせてもらったわい。スコットランドの曲なんぞ、鳥をびっくりさせるぐらいがせいぜいさ——つまりイングランドの鳥をだ。スコットランドの鳥はスコットランド語で歌うかも知れんからな。若い連中に鳥追い用のガラガラじゃなくてバッグパイプを持たせてやれ、そうすりゃあ小麥の安全は請け合うよ。」

「そう、世の中には自分じゃほとんど分りもしないことをけなして喜ぶ御仁がいるもんだよ。」クレイを

グさんが言った。

「スコットランドの曲なんてえのは、がみがみ小言ばかり言う女みたいなものだ。」バートルはクレイグさんの言葉に耳を傾けてやろうともしなかった。「同じ節を何度も繰り返すだけで、いっこうにきちんとして終りにたどり着きやしない。誰だって、あんな曲はタフトじいさんみたいに耳の遠い奴に同じことをずつと尋ねているけど、今だに返事をしてもらえないみたいだって思うよ。」(二十三章)

ジョージ・エリオットはバートル・マッシュイ以上にミセズ・ポイザーを通してユーモアを発揮している。ミセス・ポイザーがいかに魅力的に描かれているかは、この作品に対する批評が、彼女を絶賛することにおいて大体一致していることからもうかがえる。そしてこの賞賛は彼女の人間性ではなく、もっぱらセリフに集中する。確かにミセズ・ポイザーの表現力は、この作品に登場する人物は言うまでもなく、ジョージ・エリオットが描いた他のすべての人物をはるかに凌いでいる。彼女が駆使する様々な比喻は、「アダム・ビード」の出版当初、既存の諺と勘違いされたほど巧みにして適切である。しかもその奇抜な発想は読者

驚かせるほどである。

彼女自身、自分の表現力には自信を持っており、「お蔭さまで何か言いたい時には、大抵、言葉を見つけられませう」(二十四章)とアーサーに断言する。この言葉を証明するように、晩年のアダムは、彼女を評して、「何事についても自分なりの言葉で言い表わしたものでした」(十七章)と述べている。またアーウィン牧師は母に向かって、ミセズ・ポイザーが辛辣なことを言うだけでなく、優れた表現力を持っていることを次のように説明する。

「ほんとに辛辣ですよ。あの奥さんの舌は研ぎたてのカミソリのようなものです。それに言うことがえらく独創的でしてね。田舎には、ああいう、誰に教わるわけでもないのに才知に溢れた人がいるもんです。そのお蔭で田舎には諺がたくわえられているわけです。クレイグについてあの奥さんがすばらしいことを言うのを聞いたことがあるとお話ししましたよ——ほら、あの男ときたら、太陽は自分の鳴き声を聞きたくて昇るんだと信じ込んでいる雄鶏みたいだって言ったことです。まさにいち文で語られたイソップ物語です。」(三十三章)

實際ミセズ・ポイザーは、その表現力を例証し出したら際限のないほど、登場するたびに読者をうならせるような、すばらしい比喩を披露してくれる。しかも彼女の比喩は生活に密着しているために、生活信条、人生哲学がその中に滲み出ていることも大きな魅力である。例えば彼女は、踊りなど下らないから舞踏会には参加しないと言うアダムの次のように述べ、ひとつの人生哲学を教えてやる。

「いえいえ、それはいけません。踊りなんて下らないことは、あたしだって知ってます。でもね、下らないと思うことにいちいちこだわってるようじゃ、あまりたいした人間になれませんよ。あんたが飲むようにスーブが用意されたら、その濃いところを一気に飲んでしまおうか、それがいやだったら全然手をつけないか、どっちかにしなくてはいいけません。」(二十四章)

ミセズ・ポイザーは、このように優れた表現力によって読者を楽しませてくれる。しかし、彼女はそれだけでなく、別の機能をも果している。すなわち、彼女のユーモアは、重苦しい全体の流れの中でコミック・リリーフとして働きを持っている。ビールの入ったジョッキを手にしたまま転んでしまうモリーを叱りつけたミセズ・ポイザー

が、今度は自分もジョッキを落としてしまうという場面(二十章)は、物語が悲劇的な色彩を帯び始める時に現われる。そして彼女にまくし立てられた老地主ドニソーンがすぐごとと退散する、この作品中で最も愉快な場面(三十二章)は、森の中でのアダムとアーサーの対決、それに続くヘティの絶望と、アーサーを追ってヘティがさまよう場面の間にはさまれている。こうして読者は緊張の中に一瞬のくつろぎを得ることが出来る。そしてそれは次第に深まりゆく悲劇に対して、我々に心の準備をさせてくれる。

互いに効果を高め合う明と暗の対比は、前述の通り、この作品の大きな特徴であるが、これは物語全体の流れについても言える。物語はミセズ・ポイザーを中心とするコミック・リリーフや、あるいは村を挙げてアーサーの二十一歳の誕生日を祝う、華やかな第三部(二十二章〜二十六章)を間に交えながら悲劇の度合いを強めてゆく。そしてその悲劇の余韻を残しながらも、落ち着いた雰囲気を漂わせる最後の第六部はアダムとダイナの結婚と静かな幸福に向かつてゆっくりと動いてゆく。

ジョージ・エリオットは全体の流れのみならず、この対比を様々な場面の描写にも用いている。第三部のハイライ

トとも言うべき二十六章では、ヘティのロケットを見たことから、まわりの華やかさとは逆に、アダムは急に暗い気持になる。一方、ヘティの方はアーサーと逢い引きの約束を交したことから、それまでの暗い気持は消え、たちまち明るくなる。同一人物の心中、及びアダムとヘティの間に、明瞭な明暗の対比が見られる。さらに作者は、自然と人物の心の内とを対比させたりもする。「危機」と題する二十七章は、いかにも明るい調子で始まる。天気は良く、ヘイスロープの人々は収穫に大きな期待を寄せている。しかし、すぐ後には一転して、「すべてを枯らしてしまふ悲しみ」という言葉が続き、読者は出だしとは逆に不吉な予感を抱く。事実、この章でアダムはアーサーと対決する。

さらに四人の中心人物が動いてゆく方向にも、この明と暗の対比が見られる。主人公アダム・ビードはエゴイズムから苦悩を経て共感に改宗されてゆく。この人間的成長の過程はヘイスロープの生活のリズムに合わせて、じっくりと練り広げられてゆく。アダムに対し、ダイナはすでに最初から共感を持った人物として描かれる。しかし、他人の苦しみに共感する心はあっても、彼女はよるこびを分ち合うことができない。したがって、ダイナは人生のよるこび

を知る心を得る方向——具体的にはアダムとの結婚——に向かつて動いてゆく。この二人の「明」の動きに対し、アーサーとヘティは「暗」の動きを示す。アダムはエゴイズムという道徳的欠陥から遠ざかってゆくが、アーサーは内面的なもろさから、逆に道徳的に墮落してゆく。アーサーはけっして悪人ではない。冷やかな打算や悪意から行動することはしない。しかし、意志が弱く他人の賞賛を好み、自己顕示欲が強い。そしてあらゆる苦痛から逃避する。自らを非難することに耐えられないアーサーは、自分に非があっても、それを自らに正当化してしまふエゴイズムの巧妙な機構を持つ。このため彼は自分の行為がどれほど重大な結果をもたらすかを、じっくり腹を据えて考えることができない。他人の非難にも耐えられないアーサーは、ヘティの外見的魅力にずるずると負けてゆくにつれ、彼女との情事を隠すため、虚偽を重ねる。その結果、彼の意志とは裏腹に多くの人を傷つけ、自らの転落を確実なものにしてしまふ。一方、ヘティは美貌と虚栄心だけしか持たない人物である。ダイナとは正反対に、彼女にとって他者は自分の虚栄心にどのように係ってくるかという関係において存在するだけであり、エゴイズムに固められた女である。外見

的な美しさの下に隠されたヘティの道德的欠陥は、平和なホール農場の牧歌的雰囲気の中で余すところなく暴露されてゆく。彼女はアーサーとの情事をもたらす情況を判断するだけの知性を持たず、ただひたすら感覚と動物的本能に従って行動するだけである。したがって、ヘティには、アーサーの中で展開される心の葛藤はまったく見られない。

彼女はアーサーの子供を宿していることを知る時点から哀れな存在へと変わってゆく。アーサーは自分の行為がもたらした結果の恐ろしさを悟ることによって大きな苦悩を経験し、言わばその報酬として、いちどは出て行かざるを得なかった楽園に何年かのち帰ることを許されるが、ヘティはアーサーを許すこともできぬまま島流しにされ、やがて牢で病死する。彼女は誰よりも悲惨な運命をたどってゆくわけである。このように、四人の中心人物が動いてゆく方向は、くっきりと明暗を分けている。それでは各人がどのようなに描かれているかをもう少し具体的に見てゆこう。

ジョージ・エリオットは、主人公アダム・ビードにエゴイズム↓苦悩↓共感という改宗の図式をびったり当てはめ、「牧師館物語」の中では果せなかったこと、すなわち、その段階のひとつひとつをじっくり描くことに成功してい

る。彼はまず、驕れるアダムとして登場する。作者は早くも第一章で主人公が仲間と仕事をする情景の描写を通し、さり気なく彼の欠点を明らかにする。アダムはまず弟セスと対比される。兄の鋭い視線に対しセスの目には暖かみがあり、乞食はセスから小銭をせびれてもアダムには話しかけることがないと作者は述べる。戸を作っているセスは、うっかり板を張り忘れるが、それをからかったベン・クラナージに腹を立て、彼の襟首をつかむアダムは、ユーモアのセンスの欠如と気に食わぬことにはすぐカッとなる心の狭さを感じさせる。セスに向かって長々と自分の宗教観を述べるアダムの話し方はいかにも説教調であり、読者の目には彼は魅力に乏しい人物に映る。また時計が六時を打つと同時に道具を放り出す仲間を咎めるアダムは、自分の正しさを信じて疑わない驕りと、他人の弱点に対する厳しさを読者に印象づける。四十六歳になる「だんまり」タフトを咎めるアダムには、年輩者に対する思いやりは感じられない。

「馬鹿な」アダムはまだ腹の虫がおさまらなかつた。

「いったい歳となんの関係があるんだ。もう体が言うことをきかなくなっちゃったわけでもないだろう。俺



は時計が六つ打ち終える前に、まるで弾丸を食らった  
みたいにはったり腕を降ろしちまう奴なんぞ大嫌いな  
だ。それじゃあまるで仕事に誇りもよるこびも感じて  
ないみたいじゃないか。砥石だつて手を離しても少し  
は回ってるもんだよ。」(一章)

アダムが仕事をしながら、そして家に帰る道すがら口ず  
さむ賛美歌——「心をこめて言葉を話し／真昼のように晴  
れやかな心を持って／すべてを見ている神様の目は／密かな  
思いや行いも、習慣すらも見ておられる」——は一点の雲  
もない彼自身の心を表わしているが、この晴れやかな良心  
に対する自負は、自分は常に正しいと信ずる傲慢と、他人  
の過に対する厳しさに通じている。作者はさらにヘイスロ  
ープの村人に、遠慮なく彼の欠点を指摘させる。「ドニソ  
ン・アームズ」の亭主キャッソンは、「馬上の旅人」に  
アダムが村で評判の腕のいい大工であると紹介しながら、  
「だけどころと天狗になっていて、それに気が短かくて  
ねえ」(二章)と付け加える。アーウィン牧師はアダムの独  
立心を誉めながらも、「どちらかと言うと、気位が高すぎ  
る」(九章)と述べ、バートル・マッシュイは直接アダムに向  
かって「お前はせっかちで傲慢で、自分の考えに合わない

人間とすぐ事を構えがちだ」(二十一章)と、彼の偏狭で融  
通のきかない面を指摘する。

このようにして作者は主人公の道徳的な欠点を明らかに  
してゆくが、同時に彼を理想化してもいる。幕開きと同時  
に見事なバリトンを披露するアダムの外見は次のように描  
かれる。

このような声は分厚い胸だけが出せるものであり、そ  
の分厚い胸は六フィート近くもある筋骨たくましい男  
のものであった。彼の背筋はびんと伸び、頭はゆった  
りとしたバランスを保っていたので、作っているもの  
を距離を置いて見ようと多少そり身になった時には、  
休めの姿勢を取る兵士のようにであった。肘までたくし  
上げた袖の下には力比べに出たら賞を取りそうな腕が  
見えていた。しかし、幅の広い指先と、長くてしなや  
かな手は、技術を要する仕事をするには打って付けに  
見えた。(一章)

彼の外見は澄み切った良心と強い意志という彼の内面的長  
所をそのまま反映しており、ヘティの外見のように人を欺  
くことはない。アダムに対する作者の賞賛の気持は、彼と  
すれ違った「馬上の旅人」がその後姿に送る視線の中にも

表わされている。そしてこの気持はジョージ・エリオットに、自ら掲げたリアリズム宣言とは正反対のことを言わせてしまう。

読者は気づいていることと思うが、アダムはけっしてすばらしく優秀な人間でもないし、当然、天才と呼べるような人間でもなかった。しかし私は彼が働く人の中のあるふれた男だと言うつもりはない。この次にあなたがひょっとして出会うかも知れない、道具箱を肩にかつぎ紙帽子をかぶった大変腕のいい大工が、アダムのようなゆるぎない良心としっかりした分別を備え、感受性と自制心を合わせて持っているものだと決め込んでも、それはけっして完全に信頼し得る結論ではないだろう。彼は並みの男ではなかったのだ。(十章)

作者はこのように、アダムが平凡の中に紛れているが、けっして凡人でないことを断言し、彼が「理想化された職人」であることを読者に知らしめる。しかし重要な点は、このことは——クライマックスの場面を除いて——けっしてアダムの描写を損ってはいないということである。物語の中では理想化という現象は、もっぱら、仕事を神聖視

し、仕事を通して世の中に貢献したいというアダムの気持となつて現われている。この結果、作者の賞賛は、あくまでもアダムのレベルで、アダム自身の言葉を通して表現される。つまり、それはアダムの描写の中に見事に溶け込んでおり、ほとんど耳ざわりな不協和音を出すことがない。アダムはアーサーが老地主の跡を継ぐ日を心待ちにする。確かに、老地主とは折り合いが悪く、親しいアーサーが地主になることは彼にとつて都合の良いことではある。しかしアダムがその日を待ち望むのは自分の利益を考えるからではなく、もっと大きな視野に基づく信念を持つからである。

彼は世の中を正すことに関する理論など持たなかった。しかし、十分に乾燥していない木材を使って家を建てることや、着ている服は立派だが、物事の相關関係を知らない無知な連中が離れや仕事場の設計図をひくこと、さらに建具屋のいい加減な仕事や履行されれば必ず誰かを破滅させるような軽率な契約、が大きな害をもたらすことをよく承知していた。そして彼は、自分としてはこのような行いには断固反対する決意を持っていた。この点に関しては彼はきつと、ロウムン

チャーいちの、あるいはストニチャーいちの地主が相手だろうと、自分の意見を曲げなかったであろう。しかし彼はそれ以外のことについては、自分よりよく知っている人の意見に従うほうが良いと感じていた。彼はヘイスロープの森の管理が杜撰であることや、小作人の家がひどい状態にあることを十分すぎるほどよく知っていた。そしてもし老地主ドニソーンがこのまじい管理の影響について尋ねたなら、彼は忌憚のない意見を述べたであろう。しかしそれと同時に『紳士』に対してはうやうやしい態度を取るといふ無意識の気持ちも常に働いていたであろう。(十六章)

少年の頃から抱いていたアダムの夢は、橋をかけたたり、公民館を建てたり、あるいは工場を建設するというような公益的の大事業を手がけることである。これは仕事を通して少しでも多くの人のためになりたいという願望の具体的表現であり、そこには同じようにヘイスロープの改革を夢見るアーサーの、他人の賞賛を得たいというエゴイスティックな動機はまったく見当たらない。彼が一章でセスに説教するような句調で自分の宗教観を述べていることは前述の通りであるが、その中で彼は仕事をどのように見なしてい

るかに触れている。

〔前略〕どんな物にも、どんな時でも——日曜日だろうとなかろうと——神様の心はあるんだ。立派な仕事や発明にもあるし計算や技術にだってあるのさ。それに神様は我々の魂と同じように、頭や手も助けて下さる。それにもし男が仕事の時間が終わったあとでちょっとした事をしてやる——例えば女房がわざわざパン屋に出かけて行かなくても済むように天火を作ってやつたり、ちょっと庭いじりをして、じゃがいもがひとつしかできないところを二つできるようにすれば、それだけいい事をしたことになるし、まあ、誰かさんが説教師〔ダイナ・モリスのこと〕を追いかけてお祈りしたり、うめき声を上げると同じくらい神様のそばにいるんだ。〕

まだこの時点ではアダムにとって仕事は宗教的意味を持つことを知らない読者が、この言葉を聞き、彼に対して冷やかな気持ちになることは止むを得ないだろう。しかし、やがて我々はこの言葉こそ、アダムを支える最も重要な信念を表わしていることを知る。そしてこの信念は作品を通して少しも変わることがない。悲劇から一年半経った五十章

で、アダムはダイナに向かってモーゼをどう捉えているかを話す、その捉え方はいかにもアダムらしい。

「私は旧約聖書に出てくるモーゼのところを読むのが一番好きです。あの方は困難な仕事を立派にやり遂げて、他の人がその実を摘もうとした時に亡くなったんです。人間は自分の人生をそんな風に見れる勇氣、つまり死んだ後、どんな足跡が残るかを考える勇氣を持たなくてははいけませんねえ。しっかりした立派な仕事はあとあとまで残るものです。たかが床を敷くだけの仕事であっても、それがしっかり作られれば、作った人のためになるばかりか、他の人のためにもなるんです。」

このように、仕事を通して世の中に貢献したいというアダムの願望は、終始、アダム自身の言葉によって巧みに表現され続ける。したがって、その願望は実感を伴っており、けっしてうつろな響きを持つことがない。

このことはきわめて重要な意味を持つ。なぜなら、初めはエゴイストであっても、やがては彼の感受性が他者に及んでゆく可能性をはっきり表わしているからだ。アダム・ビードは、父の死、絶対的な信頼を寄せていたアーサーに

対する幻滅、ヘティの失踪と嬰兒殺し、という苦しい経験のひとつひとつを教訓としてしっかり心に刻み込み、ゆっくりではあるが着実に道徳的進歩を遂げてゆくが、その過程を描いてゆくためには、どうしてもその進歩の必然性を読者に印象づけなくてはならない。この点においてジョージ・エリオットは見事な成功を収めている。

さらに主人公に対する作者の賞賛の気持が彼の描写との自然な融合を見ていることは、もうひとつの重要な成功もたらしている。つまりアダムが人間味ある人物として、生き生きと描かれていることである。ヘンリー・ジェイムスはアダム・ビードを評して

彼は自然さと感受性に欠け、あまりにも頑固だ。彼には、それがなくてはけっして興味ある人物とは映らない。最も重要な属性、つまり誘惑される可能性に欠けている。彼の性格は、豊かさも感受性も持たない。

と述べる。しかし私の印象はまったく逆である。アダムは頑固ではあるが、それは主に自分の信念に關してである。他人の欠点には厳しいかもしれないが、弟セスには始めからやさしさを見せている。ホール農場に行けば彼は子供達の人気者だ。傲慢なところはあってもアーウィン牧師には

敬意を抱き、アーサーには敬意に満ちた友情を感じている。彼に豊かさや感受性がないと言えるだろうか。またヘティの外見に現われた、アーサーへの恋（ここでは一応、恋としておく）の兆候を読み違え、「甘い幻想」（二十章）を強めてゆくアダムはきわめて人間的である。ジョージ・エリオットは、アダムの心に映るヘティの虚像と彼女の実体、心の内を並列して描くことにより、外見と実体の矛盾という問題を展開してゆくが、読者はその問題より、現実的な面とロマンティックな夢とが同居し、微妙に交錯するアダムの内面や、ヘティが落としたロケットを見て別の恋人がいるのかと疑いながらも、必死に自分を欺し幻想にしがみつく彼の姿に心ひかれる。また森でアーサーとヘティのラブシーンを目撃し、一度は幻滅を味わいながらも、再びヘティの外見を読み違え、同じ幻想を抱くアダムは、読者に彼女が女を愛する大きな力を持っていることを強く印象づける。条件がすべて揃うまでヘティの前では結婚を口にすまいと思いつつも、彼女の涙の前にその決意も吹き飛び、衝動的に結婚を申し込んでしまうアダムは、いかにも恋する男らしい。そしてクライマックスに到るまでのアダムの苦しみの描写はすばらしい。スノーフィールドでヘティの

失踪を知ったアダムの心痛は、朝陽を受ける見慣れた物を介して巧みに描かれる。

アダムは日曜の午後からずっと今まで、見知らぬ土地で見知らぬ人達と共にいた。そのため彼は自分の日常生活をまったく思い出すことがなかった。そして今、新たな朝の光の中を帰宅し、永遠に魅力を奪われてしまったように思える見慣れた物に囲まれてみると、自分の苦しみは現実なんだ、冷酷にして不可避な現実なんだという実感が、新たな重みを加えて彼の心にのしかかっていた。目の前には作りかけのダンスがあった。それは彼の家がヘティの家となった時、彼女に使ってもらおうと暇を見ては作っていたダンスであった。（三十八章）

ジョージ・エリオットはアダムの苦しみをこれ以上述べようとせず、さっとセスの描写に切り換える。下の物音を聞き、兄の帰宅を知ったセスは階段を降り、仕事場へ行くが、そこで見た兄の憔悴した姿にびっくりする。とっさに何か大きな不幸があったことを悟ったセスは、椅子に坐ったままのアダムに近づいて行くが、体が震えて言葉が出ない。セスは兄の横に坐り低い声で、どうしたのかと問

う。そして最も効果的な描写が続く。

アダムは話すことができなかつた。悲しみを表に出したことのなかつたこのたくましい男は、同情する心を初めて身近に感ずると、まるで子供のように胸が一杯になるのを感じた。彼はセスの首にすがってすすり泣いた。

もし最後までこの調子でアダムの苦悩を描けたら、と思わざるを得ない。この場面に先立ってジョージ・エリオットはヘティの失踪を知つたアダムの不安、動揺を直接描写せず、必死にヘティの行方を捜すアダムの姿を描くだけである。したがって、アダムがセスのやさしさに触れ、それまで抑えて抑えていた悲しみが堰を切り、涙となつて溢れ出てくるこの場面は、読者の心を揺り動かす大きな力を持っている。それまでもつぱら強さを強調されてきた男が涙を流す場面には、ややもすると読者の憐れみを誘わんとする作者の意図が見え過ぎてしまい勝ちであるが、この場面にはまったくそういうところがない。アダムの涙はあくまでも大きな説得力を持っているのである。ところが物語がクライマックスにさしかかると、この調子は失われてくる。

アダムの「本当の悲しみ」(三十九章)はヘティが嬰兒殺

しの罪でストニトンの刑務所に入れられていることを知る時点から始まるが、同時にアダムの描写にも変化が見られるようになる。まず彼がその事実を知つた時の独白は次のように描かれる。

「彼女がそれ〔赤ん坊〕を隠したのは恐かつたからなんだ……私を騙したけど、彼女を許してる……私はお前を許してるよ、ヘティ……お前も騙されたんだ……お前にはつらいことになつてしまつたなあ、かわいそうなヘティ……でも誰がなんと言おうと私は信じない。」

(三十九章)

このようにアダムの苦悩の描写はセンチメンタルな調子を帯びてくる。苦悩に宗教的な意味を見い出すジョージ・エリオットは、この作品では「牧師館物語」以上に明確に苦悩と宗教のイメージを重ねてくる。作者が「言いよりのない激しい苦しみは、洗礼、生まれかわり、新たな状態への導きと呼んでも良いだろう」と述べる四十二章では、アダムは大きな苦悩の経験から、苦しむことの意味を実感として捉え、同じように苦しんだ多くの人々に対する共感に目覚める。主人公が共感に改宗される一瞬であり、最も重要な場面であるが、ここでジョージ・エリオットはセンチメ

ンタリズムを見せてしまう。本当の苦悩を知る以前の「ぼんやりした、眠ったような」状態から目覚めたアダムは、次のような一人言を言う。

「ああ」アダムはテーブルに寄りかかり、時計の文字盤をぼんやり見つめながら、うめくように言った。

「人間はこのように苦しんできたんだ……あわれな、無力な若者は、彼女のように苦しんだのだ……ほんの少し前、あんなに幸せそうにして、かわいらしかったのに……おじさんやみんなに別れのキスをして、みんなも彼女に無事を祈ったのに……ああ、かわいそうな、かわいそうなヘティ……お前は今、そのことを考えているかい。」

それまでのアダムの描写が優れているだけにこの二つの独自のまずさは一層目についてしまう。

アダムは共感に改宗されると、それまでほとんど何も口にしなかったが、バートル・マッシーに勧められ、パンを食べ、ブドウ酒を飲む。しかも時は四旬節である。この場面と聖餐式とのパラレルはあまりにも明白である。主人公が聖餐を授かると、今度は作者の賞賛の気持が露骨に現われてくる。それまでヘティの裁判を傍聴する勇氣もなく、

ただじつと部屋にこもっていたアダムは、マッシーと共に法廷に出る決意を明らかにし、決然と立ち上がる。

彼は昨日と同じようにやつれ、無精髭を生やしていた。しかし彼は再びすつくと立ち上がった。その姿は以前のアダム・ビードのようであった。

ジョージ・エリオットは、このアダムに対する賞賛の気持ちを、法廷に現われた彼の姿が他の人にどういふ印象を与えたかという描写の中に表わす。アダムの登場はいっせいに傍聴人の視線を集める。作者はさらに、つい最近アダムと会ったばかりのアーウィンですら、彼の表情に浮かぶ苦悩の痕跡に驚いたと述べる。そればかりか、この裁判を傍聴したヘイスロープの人々が、晩年、ヘティ・ソレルの話をして聞かせる時には、「まわりの人より頭ひとつとび出たあのかわいそうな男アダム・ビードが法廷に入ってきて、ヘティの脇に坐った時、どれほど感激したか」(四十三章)を忘れずに話したとまで付け加える。こうして物語は次第にメロドラマの様相を呈してくる。ヘティに絞首刑の判決が下る場面は次のように描かれる。

しかし「そして汝の息が絶えるまで首を吊るものとする」という言葉と同時に、つん裂くような悲鳴が法廷

に鳴り響いた。それはヘティの悲鳴であった。アダムは立ち上がり、彼女の方に手を延ばした。しかしその手は届かなかつた。彼女は気絶して床に倒れ、外に運び出された。

メロドラマは、荷車に乗せられ刑場に向かうヘティのもとへ、手に減刑の恩赦令状を持ったアーサーが馬を飛ばしてやってくるのできわまる。そしてそれ以後は、二度とセンチメンタリズムや露骨な賞賛の表現は現われない。作者はアダムに残された最後の試練——アダムが、以前アーサーを殴り倒した同じ森の中で、再び彼に会う場面——の描写では、メロドラマになる前の調子を取り戻す。したがって、やつれたアーサーの姿を見て、彼もまた苦しんだのだと悟ることにより、怒り・憎しみを克服し、自ら握手を求めアダムは読者に、彼が本当に他人の苦しみを思いやる心を得たことを確信させる。

物語はアダムとアーサーの再会から一年半の歳月を置き、今度はアダムとダイナの結婚に向かってゆつくりと静かな調子で展開される。しかしジョージ・エリオットは、この二人を結婚させることによって多くの人の批難を浴びることとなった。例えばヘンリー・ジェイムスは、アダム

とダイナの結婚及びヘティの救済に関してジョージ・エリオットは、はたして明確なビジョンを抱いていたのだろうかと問い、特に前者については、それは単なるルイスの思いつきであり、ルイス自身の文学的判断が誤っていることを証明するものだ<sup>(12)</sup>と述べている。リーヴィスもこの意見に同意している<sup>(13)</sup>。両者ともジョージ・エリオットは物語には結婚があり、あわやという時に助けられる場面がなくてはならないという小説のしきたりに妥協したと考える。デビッド・セシルは二人の結婚には必然性がなく、アダムの好きな女のタイプを知っている読者にはダイナとの結婚はありそうもないことに思える、そして美德は報われるべきだ<sup>(14)</sup>という道徳的見地から、ジョージ・エリオットは二人に、その情況の元では最も手頃な結婚という報酬を与えたのであり、機成上の調和を保つという目的を前にしてジョージ・エリオットの真実に対する把握は緩んでしまったと述べる<sup>(15)</sup>。ヘティの救済についてはどう言われても仕方ないだろう。ちなみにハーヴィもこの点についてはしかるべき弁護の言葉を持たないと述べている<sup>(16)</sup>。確かにジョージ・エリオットは物語をドラマティックにするために、小説の常套手段を用いただけに過ぎないという印象は拭えない。その



結果、メロドラマティックになってしまったことは前述の通りである。しかしアダムとダイナの結婚は、単にルイスの思いつきに従っただけという単純な動機しか持たないのであろうか。ジョージ・エリオットは確かに「アダム・ピードの歴史」と題した日記の中で次のように言っている。

ダイナとアダムの最終的な関係は、私がジョージ「ルイスのこと」に第Ⅰ部の最初の部分を朗読してあげた時、彼が提案したものだ。彼はダイナの描写が大変気に入り、読者の関心はダイナに集まると確信したので、結末では彼女を中心人物にすることを望んだ。私はすぐにこの考えに賛成し、三章の終りから常にそのことを頭に置いて書いた。

アダムとダイナの結婚がルイスの思いつきであることは、こうして作者自身の言葉によってはっきり証明されている。しかし私は、それがジョージ・エリオット自身の最初からの考えではなかったことが直ちに明確なビジョンの欠如につながると思わないし、また物語には結婚がなくてはならないという因襲に従っただけだとも思わない。私には、ジョージ・エリオットがアダムとダイナの結婚に対してはっきりしたビジョンを持っていたように思える。それ

がどのようなものかを見てみよう。

アダムは第Ⅴ部の終りで共感に改宗され、感受性を他者の苦しみへと広げることができた。しかし、一年半後、再び物語に現われるアダムはどのような状態にあるだろうか。ジョージ・エリオットは五十章で、我々もがき苦しんだ後、再び元の自分に戻ることはないと言われ、さらに次のように続ける。

我々の悲しみが心の中に不滅の力として残り、すべての力が形を変えてゆくように苦痛から共感——この、我々の最も優れた洞察力と最も暖かい愛をすべて含んでいる、たったの一語——へと変わってゆくことにむしろ感謝しようではないか。しかし苦痛から共感へと——この変化が、すでにアダムの中で完了したということではない。彼の心には、今だに苦痛の余韻が強く残っており、アダムはこの余韻は彼女の苦痛が思い出ではなく今なお存在するものである限り、消えることではないと感じていた。そして彼女の苦痛は新たな朝の光と共に再び始まるのだと考えなくてはいけないと感じていた。我々は肉体的苦痛と同様、精神的苦痛にも慣れてゆくものだが、それでも苦痛に対する感覚を失

うことはない。それは生活の中の一習慣となり、我々は完全なる安楽という状態が自分に可能なものだとは思わなくなる。

この状態にあるアダムが取る行動は、ただひたすら仕事に打ち込むことである。「立派な大工仕事は神の意志」と信ずるアダムは、仕事にそれなりの満足を見出し出しているが、「義務がその鉄のこてと胸甲をはずし、彼をやさしく抱いて休息を与えてくれる」ような時を考えることはできない。愛する力が強く、誰かを愛する絶対的必要性が心の奥底に潜在するアダムには、今や人生のよろこびはない。しかしアダムの心の中に、自分でも気づかぬうちにダイナへの愛が芽生え、日ごとその激しさを増していたのだ。ダイナの愛を母リズベスが彼に気づかせた時、彼ははつきりと「死んだよろこびの復活」(五十一章)を感じる。このような描写に出合った時、我々はなぜジョージ・エリオットはアダムとアーサーの再会で物語を終らせなかったか、なぜ彼女はアダムとダイナを結婚に導いたのか、という問に答えられるのではないだろうか。つまりそこには、明らかに「エイモス・バートン」「ギルフィル」の失敗、「ジャネットの後悔」の成功が生かされていることが分る。もしア

ダムが共感を得ながらも心からはよろこびが消えている状態で物語を閉じれば、妻ミリーの死によって共感に改宗されたために、以後、妻の思い出だけに生きなくてはならなかったエイモス・バートンや、始めから共感を備えていたために、愛するカテリーナの死の前にただ茫然となるより外に反応の示しようがなくなってしまうギルフィルの失敗を繰り返すことになる。ジョージ・エリオットは、この両者がたどり着かざるを得なかった否定的結末を避けたかったからこそ、「ジャネットの後悔」ではより肯定的な結末を導いたのであり、同じことが「アダム・ビード」についても言えるのである。第V部では、ヘティは絞首刑を免れたとは言え島流しにされる。アダムとアーサーは思い出深い森の中で握手をして別れるが、アダムの心にはよろこびはなく、アーサーは祖父の死によって土地を相続しながらヘイスロープに止まることはできず、軍隊に身を投ずる決意を明らかにする。せめてもの救いと言え、アダムはヘイスロープに止まり、ポイザーにもそうすることを説得してくれというアーサーの頼みを彼が受け入れることぐらである。

これに対し、第VI部五十五章ではアダムとダイナは結婚

し、その結婚から五年経ったエピソードには、よろこびに拒絶反応を示していたダイナが子供に囲まれ、一日の仕事を終えて帰ってくる夫アダムを迎える姿がある。そしてアサーが再びヘイスロープに帰ってくるという知らせもある。しかし明るい調子だけが支配しているわけではない。我々はここでヘティの死を知らされる。アサーは健康を害している。そしてアサーがアダムに言う言葉——「君は昔、『けっして償うことができない過というものがあるんです』と言ったけど、それは本当だ」——は結末に厳粛な空気を漂わせる。こうして物語は「ジャネットの後悔」とは異質の、言わばくすんだ明るさの中で終わる。明らかにジョージ・エリオットは、どこまでも澄み切った青空ではなく、薄曇りの空のような調子でこの作品を閉じたかったのである。

ジョージ・エリオットがアダムとダイナの結婚に対して持っていたと思われるビジョンは以上の通りである。しかしそれに劣らず重要なことは、二人が結婚に到る過程——互いに相手を渴望し、結婚を強く望むまでに到る両者の内面——が読者を納得させるよう、十分かつ自然に描かれているかという問題であろう。この点において、ジョージ・

エリオットは成功しているとも言えるし、失敗しているとも言える。つまり、アダム・ビードはうまく描けているが、ダイナの描写は失敗である。

作者はアダムの中でダイナへの愛が成長してゆく様子を「真実に対する把握」をゆるめることなく描いている。その愛はけっして突然彼の心に生ずるわけではなく、過去の情熱の悲しい思い出と密接に結びつきながら、彼自身気が付かぬうちに芽生え、ゆっくりと成長していった愛である。物語が一年半の間隔を置いて再開される理由のひとつをここに見い出すことができる。彼がその愛に気付く時、我ながらダイナを求める己の渴望の激しさに驚かされる。彼はヘティを失うことによって「愛する力」誰かを「愛する必要性」(五十章)が一層強まっていたことに彼自身気づいていなかったのである。ヘティを愛することによって深い悲しみを味わったからこそ、ダイナへの愛はきわめて貴重なもの、神聖なものに思えてくる。そしてアダムが、ダイナが自分を愛していることに気づく過程はいかにもアダムにふさわしい。ダイナの愛の兆候をまったく読み取れず、母に言われて初めて気がつき、同時に彼女の様々な言動の意味を一瞬に理解するアダムと、ヘティの態度を読み

違え、自分に恋している証しと勘違いするが、アーサーとの逢引きを目撃した瞬間、すべてを悟るアダムは本質的に同じ人間であり、一貫性を失っていない。

しかし問題はダイナの扱い方だ。ジョージ・エリオットは、アダムと結婚させるべく第VI部に入るとダイナを言わば聖女の座から引きずり降ろし、恋する普通の女にしてしまおうとする。そこに無理があり、読者を納得させる力に欠けてしまう。ダイナが理想化されていることは誰の目にも明白な事実であるが、アダムの場合とは異なった方法で理想化されている。彼女は物語の最初からすでに他者を思いやる心を持っている。と言うより、ダイナは愛他主義に徹した人物であり、自分の感情を持たない。あるいは自分の感情を持つとしてもそれを厳しく抑制しているために、そのように思えるのかもしれない。いずれにせよ、そのために作者はほとんどダイナの心の中に入れてゆくことができない。したがってダイナは話す言葉と外見と他の作中人物の心に映る姿が描かれるだけであり、しかも他の中心人物のように作者の直接的コメントを受けることがほとんどない。そして理想化されていることを示す証拠は、もっぱら彼女が他の人物にどう映るかに集中する。作者は二章の

大半を『緑地』で行なわれるダイナの説教に費やしているが、そこで初めて姿を見せるダイナは、まず「馬上の旅人」に次のような印象を与える。

旅人は彼女が荷車に近づき、その上に乗るのを見ながら驚きを覚えた。彼女のいかにも女らしい優美な外見に驚いたのではなく、彼女の振舞に自意識を持っているようなところがまったく驚いたのだ。彼は当然彼女が真面目くさった表情をつくり、一步一步注意深く歩を進めてくるものと思ひ込んでいた。彼は、その顔はきつと聖人であることを意識したほほえみに包まれているか、人を威脅するような苦い表情を浮かべているか、どちらかであるかと思っていた。旅人は二つのタイプのメソヂェイスト——恍惚となる者とすぐ怒り出す者——しか知らなかった。しかしダイナはまるでちょっとそこまで買物に出かけて行くかのような足どりで荷車に近づき、幼い男の子のように外見を意識していない様子であった。

こうして作者はダイナの自意識の欠如を強調し、さらに彼女の外見をこと細かに描いてゆく。そこから我々が抱くダイナのイメージは、物静かで清楚な美しさを持つてはいる

が、作者の「女らしい」という言葉とは逆に女を感じさせない女性であるということだ。マーチン・ポイザーは「男はヘティを追いかけるみたいだダイナを追いかけたりはしないよ」(十八章)と言うことによって、このイメージを強める。さらにアーサーがダイナについて語る言葉は読者に彼女の気高さを印象づけると同時に、ミリー・バートンを思い出させる。

〔前略〕でもあの人にはなにか印象的なところがありませんよ。初めて合った時にはほんとに気恥ずかしい思いました。あの人は家の前の日向に坐って下を向いて編み物をしてたんです。私は馬に乗ったまま、よその人とは気づかずに『マーチン・ポイザーはいるか』って大声を出してしまっただけです。ある人が立ち上がって私を見ながら『家の中だと思いません。私が呼んでまいります』と言った時には、あんな無愛想に話しかけたことがほんとに恥ずかしくなりました。クエーカー教徒の服を着た聖キャサリンみたいに見えませんでしたねえ。ああいう顔は我々凡人の中では滅多にお目にかかれませんか。』(三章)

アーウィン牧師は、ダイナにはどんなに荒っぽい鋳夫であ

ろうと、敬意と好意に満ちた態度で接すると述べ、彼女が「やさしさと品の良さと清潔さ」(二十五章)にあふれた女性であることを強調する。あの女嫌いのバートル・マッシュィですらダイナに会うと「彼女の顔をじっと見つめたまま、その場に釘付けに」なってしまう(四十六章)。

ダイナの理想化は、このように他人に与える印象となつて具体的に現われてくる。美しく、清潔で、気高く、しかも自己を完全に滅却したダイナ・モリスは、女という次元を越えた存在、つまり聖女である。そして彼女は第V部の終りまで聖女でいつづける。ダイナが独房に閉じ込められたヘティを訪れると、案内に立つ看守はずっと横目で彼女を見ているが、口を開こうとしない。自分の声が耳ざわりに聞こえるような気がしているからである。そしてようやく口を開くと、「自分に出せる最も丁重な声」(四十五章)で話す。ヘティの処刑を見ようと集まった群衆は、ヘティを乗せ絞首台に向かう荷車の上にダイナの姿を認めると、「一種の畏敬の念」に打たれる。するとそれまでのどよめきは消え、あたりは水を打ったように静まり返る(四十七章)。

ダイナが聖女である以上、話す言葉も当然普通の人間の

それではない。ジョン・ベネットはダイナの性格描写が失敗しているひとつの原因は、彼女が「まるで聖書に出てくるような言葉」をいつも話すことだと言っている。確かに彼女の言葉だけに目を向ければ「気取っていて堅苦しい」という印象を与え、作者の意図とは逆にダイナの自意識を感じさせるだろう。しかしダイナは信仰のためだけに生まれてきたような、メソディズムに徹した人物である。彼女は八章で説教師になった動機をアーウィン牧師に話すが、その内容は普通ではとても信じられるようなものではない。しかし二章ですでに説教を聞かされ、自然な振舞、まろやかで確信に満ちた声、音楽的な抑揚によっていきなり聴衆をひきつけ、やがて彼らの心を激しく揺さぶる様を見て、彼女が天才的説教師であることを確信している読者には、その動機もダイナならあり得ることに思える。聖書から取ってきたようなダイナの「気取っていて堅苦しい」言葉は、むしろ彼女にふさわしいと言える。ジョージ・エリオット自身、ダイナを直接知らない人には彼女の言葉が堅苦しい印象を与えることは十分承知していたのであり、だからこそセスに彼女の手紙を読ませてもらったアダムはこう言うのだ。

「もしあの人に一度も会ったことがなかったら、この手紙や差出人をどう思っただろうなあ。きつと女の説教師なんていけ好かないと思ったにきまつてる。でもあの人が言うこと、することはなんでも正しいように思えてくる。手紙を読んでいるとあの人がここについて話しているような気がしてね、不思議に声や表情が思ひ出されるんだ。」(三十章)

アダムが指摘しているように、ダイナの言葉は彼女にふさわしいのであり、話す言葉を通して我々の心に聖女ダイナのイメージがしっかりと築き上げられてゆく。しかし彼女は完全無欠ではなく、ひとつだけ欠点がある。前述の通り彼女は人生のよろこびを受けつけない。他人の苦しみを分かち合うことはできても、よろこびを分かち合えない。ダイナはホール農場に滞在し、ささやかなくつろぎの時を持つことにすら後めたさを覚える。したがってヘイスロープに来て、すぐスノーフィールドへ帰りたがる。ダイナ自身はヘイスロープの村人が不思議に「神のみことば」に無感覚であり、自分がスノーフィールドへ帰ることが「天のみこころ」だと彼女らしい言葉を口にする。しかし彼女がたびたび口にするこの「天のみこころ」とい

う言葉の裏には、よろこびを感じることに對する罪惡感が潜んでいる。このことは第V部まではさほど顯著ではないが、第VI部に入ると作者はそれをはっきりと表面に出してくる。四十四章ではダイナ自らおぼのミセス・ポイザーに、ホール農場にいることは「誘惑」だと告白し、よろこびを感じることに對する罪惡感を明らかにする。

「でもこの安樂とぜいたくに満ちた生活から離れることは、私の魂にとって本当に必要なのです。すべての物があまりにも豊富にあり過ぎて私には楽しくありません。少なくとも、ほんのしばらくの間、離れる必要があります。私の心が何を必要とするか、回りにある物で私を危険に晒すものは何かは私だけにしか分らないことです。私に居てほしいとおぼさんの願いは、それが私自身の願望に反するから耳を傾けようとしないうる義務の声とは違ひのです。人間愛が私の魂の中で天の光を閉め出す霧となつてしまわないように私が戦わなくてはならない誘惑なのです。」

ダイナはポイザーの子供達と楽しく遊ぶ時でも一抹の不安を抱く。このような描写が第VI部に突然現われてくる理由は明白だ。つまりダイナはアダムと同じ状態にあることを

読者に分らせるためである。アダムは共感に改宗されながら、心からはよろこびは消えている。ダイナは思いやりに徹しているがよろこびを知る心を持たない。両者は、この第VI部では、言わば同じスタート台に立ち、同じゴールに向かつて動いてゆくのである。ここにも我々は二人の結婚に對する作者のビジョンをはっきりと感じ取ることができのだが、ジョージ・エリオットはそこまでに到るダイナの描写に失敗してしまつた。

第VI部に現われるダイナは、自意識の欠如を強調されてきたそれ以前とは逆に、今度は強烈にアダムを意識していることを強調される。確かに作者は恋するダイナの布石は打つてある。早くも二章では「馬上の旅人」がダイナについて「美しい女性だ、でも説教師になるように生まれてきたのでないことは確かだ」という印象を抱く。また十一章ではアダムにじつと見つめられ「生まれて初めて痛いほどの自意識」を感じている。第V部とVI部の間に一年半の期間を置いている理由のひとつは恋するダイナに對する読者の抵抗をなくすることであろう。

しかしそれでもダイナの変身に読者は戸惑いを禁じ得ない。第VI部に入るや、ダイナはそれまでの彼女からはとて

も想像できないような態度、振舞を見せるようになる。ホール農場にやって来たアダムはダイナに挨拶しようとして手を差し出すが、彼女がその手を握ると、彼の姿を見て赤く染まっていた頬から血の気が失せる。そして彼女は「おずおずと」彼を見上げる(四十九章)。スノーフィールドに帰ると言うダイナを、回りの者は引き止めようとするが、アダムだけは彼女の意志を尊重し、好きなようにさせてやるべきだと言う。しかしダイナはこの言葉に突然涙を流す。勿論、この涙の意味するところは明白だが、読者にはどうしても不自然としか映らない。さらにダイナに対してこれまで使われてきた「百合」の比喩は、ここでは「バラ」に変わり、「月の光」は「穏やかな日の光」へと変化する。回りの人もダイナの前で急に夫という言葉を口にし出し、結婚を暗示する。こうした、アダムを前にした時の突然の自意識と動揺、「百合」から「バラ」へ、そして「月の光」から「日の光」へとという比喩の変化はダイナの、聖女から恋する普通の女への変身を表わすものであるが、とても読者を納得させる力はない。我々の心の中に築き上げられてきた聖女ダイナのイメージと、第六部の恋するダイナのイメージはどうしても重なることがなく、その結果、ダイナ

の印象は混乱し、焦点の合わない映像のようにぼけてしまう。しかも作者は終始ダイナの心の中に入って行こうとしないために、結婚を決意するに到る彼女の分析はまったく見られない。アダムのプロポーズを受けた時のダイナの心中は、一方にアダムがいて手を差し延べている、他方にキリストが悲しむ人々を指さしながら自分を見ている(五十二章)という彼女自身の言葉で表わされるだけであり、心の葛藤はまったく描かれていない。ダイナに関しては、「題材の扱い方こそ芸術の真随である」と言うジョージ・エリオットらしからぬ出来映だと言わざるを得ない。

このようにジョージ・エリオットは、アダムとの結婚を実現させるために意識的にダイナを描く調子を変えていくわけであるが、この描写の調子の変化はヘティにも見られる。彼女は、一見、ヘティに対して暖かさのこもった客観的な目を向けているように思える。この印象を与えている最も大きな原因は、さまざまあるヘティの描写があまりにもすばらしく、他の印象をぼかしてしまっていることである。アーサーがいるものと思ひ、身重の体でウィンザーに向けヘイスロープを出奔し、彼がすでにアイルランドに発ったことを知るや、ヘイスロープに戻るまいと思ひながら



も一種の帰省本能から、来た道を帰ってゆくヘティの描写は、作者が憐憫を抱きながらもヘティから一定の距離を保ち、けっして感情的にのめり込んでいないことを感じさせる。このヘティにはジョージ・エリオットはほとんど解説を加えることがない。ヘティの深まりゆく絶望は、もっぱら彼女の行動及び些細な事柄の積み重ねと、そのひとつひとつが徐々にヘティから希望を奪ってゆく様を通して描かれる。したがってヘティの絶望と、その中であつてただ動物的本能によつて行動するヘティの姿には、読者の憐みを誘う大きな力がある。

しかし、このさまよえるヘティと、それ以前のホール農場で働くヘティを描く筆のタッチには、はっきりした相異が感じられる。後者に向けられる目には、前者に対するような憐み、暖かさは感じられない。我々はむしろそこに冷やかで皮肉な、意地の悪いと言つていいような作者の目を感ずる。この変化はヘティが妊娠に気づく三十五章あたりから現われてくる。それ以前は、ヘティの美しさを強調しながら、その下に隠された道徳的欠陥を容赦なく暴露してゆく。しかも様々な比喻による彼女の美しさ、かわいらしさの描写自体、きわめて暗示的である。例えばヘティが初

めて物語に姿を現わす時、「心を狂わせるほどかわいらしい十七の娘」(七章)と紹介されるが、その直後、ジョージ・エリオットは彼女の美しさを次のように描く。

ややくそになることから、おどおどするに到るまで色々と男達に馬鹿な真似をさせる美しさには多くの種類がある。しかし男だけでなく、知性を持ったあらゆる哺乳動物や、女性すらも夢中にさせるべく作られたように思える種類の美しさがひとつある。それは、子猫や、うぶ毛に覆われ嘴もまだ柔らかで、そつと打ち寄せるさざ波のような声で鳴く大変小さな鴨の雛、ちよこちよこし始め、わざといたづらをするようになつたばかりの幼な子の美しさである。その美しさに対しては、どんなことがあつても怒ることはできない。ただ、それを前にした時の自分の気持を理解できず、力一杯抱きしめたくなるだけだ。ヘティ・ソレルの美しさは、そういう種類の美しさであった。

この一節はヘティの美しさを的確に伝えてはいるが、同時に、生まれて間もない動物や幼児の比喻を通して彼女の幼稚なメンタリテイ、他者に対する感受性の欠如、感覚だけに支配されていることを暗示している。さらにそれに統

く一文は明らかにアーサーを狂わせてゆくことを示す。ヘティの美しさを描写するこの調子は、作者の目が直接ヘティの肉体的欠陥に向けられるとさらに一層強くなる。「外見上の魅力はすべて軽蔑する」(七章)ミセス・ポイザーですら、思わずヘティの美しさに見惚れてしまうこともあるが、彼女はヘティの心が「石のように冷たい」(十五章)ことを感じ取っている。ダイナもまたヘティには「暖かい猷身的な愛」(十五章)が欠けていることに気づき「この心の空白」に同情を寄せる。

しかし、この二人の人物の心に映るヘティの姿より、作者自身による描写の方がはるかに冷やかである。ヘティは他人の苦しみ、不幸にはまったく無感覚であり、アダムの父サイアスの死を知らされても少しも心を動かされることはない。彼女が敏感に感じ取るものと言えば、自分に対する男の思慕の情だけであり、またそれに対しては気味の悪いほど敏感である。ジョージ・エリオットはヘティを根なし草に喩えている。つまりヘティは過去と何らの精神的絆を持たない存在である。したがって自分を実の娘のようにかわいがり育ててくれたおじマーチン・ポイザーやその家族になんの愛情も感じない。それどころか、おじやお婆の

ような中年の人間に対して嫌悪感すら抱いている。作者は、ヘティが自ら進んでおじにパイプを取ってやる時には、客に自分の歩く姿を見せたいという虚栄心が動機となつてゐることを指摘する。そしてマーティ、トミー、トティという、かわいい盛りのポイザーの子供達もヘティにだけはただ煩わしい存在でしかないと述べる。

この、人を愛することができない、エゴイズムに固められた冷酷なヘティがアーサーを抱く気持に対しては、作者はほとんど「愛(love)」という言葉を使わず、代わりに「情熱(Passion)」という言葉を使う。作者は前者を自己を顧みない猷身的な愛の意味で、後者を虚栄心を満たしたいというエゴイスティックな欲望を表わす意味で用いている。たまた「愛」という言葉が使われても、単独ではなく「彼女の愛を構成する子供っぽい情熱と虚栄心のすべて」(三十一章)というように限定語句を伴っている。事実、ヘティがアーサーにもらった耳飾りをことさら好むのは、それを買うためにアーサーがわざわざトレドルストンまで行ってくれたことへのうれしさ故ではなく、ただ耳飾りそのものが気に入ったからである。装飾品に対する好みの方が、アーサーに対する情熱よりも強いのだ。ヘティがアー

サーにひかれるのは、彼の中に虚栄心を満たしてくれる可能性を見出し出しているからであり、アダムに無関心なのは彼にそれが無いことを知っているからである。

またヘティには自分の夢をはっきり形づくり、言葉で表現するだけの知性も与えられていない。ヘティが抱く夢の描写になると、作者は「形の無い」「ほんやりした」「断片的で混乱した」などの形容詞を用い、「あいまいな、輪郭のぼやけた絵」(十五章)と表現する。さらに作者はヘティを他の人物と比較することによって彼女の欠陥を浮き彫りにする。十五章では無器量なモリーとの比較があるが、これはヘティのエゴイズム、冷酷さに対する痛烈な批判だ。そして同じ章の後半で彼女はダイナと比較される。ヘティがこの比較に耐えられないことは明白だが、作者は聖女ダイナのイメージをことさらに強めることによってヘティの虚栄心、ナルシズム、他者を受け入れぬ心の狭さ、感受性・知性の欠如など、あらゆる欠陥を読者の前にさらけ出す。さらにヘティの虚飾へのがれと想像力の欠如は、アーサーからの別れの手紙を読んだ後、侍女になろうと思うことの中に如実に現われる。

彼女はその日の朝にでも逃げ出したかった。そして二

度と見慣れた顔を見たくないと思った。しかしヘティの性格は困難に立ち向かう性格ではなかった——慣れ親しんだものを自分から捨て、未知の状態の中に盲目的に飛び込んでゆく性格ではなかった。彼女は情熱的ではなく、ぜいたくを好む、見栄っ張りな性格の持ち主であった。そしてもし極端な手段を取るようなことがあるとすれば、恐怖のあまりその手段を取らざるを得ないような状態に追い詰められる必要があった。彼女の狭い空想の範囲内ではあまり思考を巡らす余地はなかった。したがって彼女がこれまでの生活から逃れるために取る手段はすぐに決まった。侍女になりたいからこの家を出させて下さいっておじさんに頼もう。おじさんの許しを得ていることを知ればリディアさんの侍女がきっと私の奉公口を見つけてくれる。(三十一章)

我々はこうした一連の描写の中に、ヘティに対する冷たく、批判的で、皮肉な、そして何よりも執拗なまでに彼女の道徳的欠陥をあげようとす意地の悪い作者の存在を感ずる。要するにヘティには外見の美しさ以外には何ひとつ与えられていない。ジョージ・エリオットはなぜこれほど

までにヘティに敵しいのか、と思わざるを得ない。酒に酔つてはジャネットを虐待したデンプスターですら、もつとましな扱いを受けている。どうにも救い難い悪人ダンスタン・キャスですら、もつとあつさり描かれている。ヘティ同様、かわいらしいが頭の弱いテッサには、人を愛する力が与えられている。テッサはテイトーに惚れ彼に騙されるがけつしてみじめな思いをすることはない。テイトーの亡き後はロモラに暖かく見守られる。ただヘティだけが手敵しい扱いを受ける。この点に関し、ウォルター・アレンは「ヘティはただ美しいが故に悪い点をつけられたかのようだ」と述べ、ヘティに対する作者の慈悲の心を感じさせない手法上のまづさを指摘する。<sup>(19)</sup> プリチエットはその原因をジョージ・エリオット自身の私生活に見い出そうとする。

ジョージ・エリオットは自らを罰していたのであり、ヘティは、ジョージ・エリオット自身が犯し、しかも恐らくは無意識の中で失望したことには、それに対する罰を受けなかった『罪』(ルイスとの関係を指す)のために苦しまなければならぬ。<sup>(20)</sup>

一方、ノブルメイヤーは、ヘティの扱い方はジョージ・エリオットの倫理主義と、倫理とは無関係な自然の秩序を見

つめる彼女のリアリズムとが調和せず、いまだ葛藤していることを示すと捉える。<sup>(21)</sup> 各々、説得力を持つていると思うが、私に考えられる理由は別である。前述の通り、この作品の手法上の大きな特徴のひとつは明と暗の対比であるが、これは人物説定についても言えることだ。意志が強く、一度やるまいと決意したことはけつしてしないアダムと、決意と挫折を繰り返すアーサーは明瞭なコントラストを成すが、ダイナとヘティのコントラストはそれ以上に顕著である。つまり、ダイナを聖女にまで理想化した反動がヘティの極端な道德的欠陥となつて現われているのではないだろうか。ジョージ・エリオットは、ダイナを気高い崇高な存在として描けば描くほど、ますますヘティには冷やかになり、執拗に彼女の欠陥をあはいていったと私は思う。途中からヘティを憐みの対象と見なしてゆくのは、あまりにも敵しすぎたことへの反省も考えられるが、それ以上に、彼女の置かれた哀れな情況が作者の同情を強要したのであろう。ヘイスロープの外にはほとんど出たことのない世間知らずの、それもまだ十七歳という若い娘が、ただひたすら恥辱から逃がれたい一心で住み慣れた村を出てゆく。わずかな金しか持たずウィンザーへ行く道も知らな

い。人の好奇の目を避けるようにしてやっとたどり着けば、アーサーが所属する連隊はすでにアイルランドに発つた後だ。ヘイスローブに戻るつもりはないのに、足はいつの間にか来た道を辿っている。絶望は次第に度を強め、ついに自己憐憫から流した涙も出てこなくなる。死を決意するが生命力は強く、無意識の内に生き長らえる術を求め。こうした姿を描く筆のタッチは明らかにこれまでとは異なる。そして身を投げるつもりでやって来た池の縁に坐りパンをむさぼると、ぐっすり眠り込んでしまうヘティの姿や、生きていることに対するうれしさの余り涙を流したり、手足にまだ感覚があることのうれしさから思わず腕にキスをするヘティは、皮肉を向けるには恰好の的であるが、作者はけっしてそうはしない。ただヘティの動作と心の内を描くだけである。彼女があわやという時に死刑を免れるのも、さまよえるヘティに対する作者の憐みの余韻かも知れない。

これに対し、ジョージ・エリオットはアーサーの描写においては終始一貫性を保ち続ける。彼の行動の動機は、人間心理に対する優れた洞察力によって見事に分析される。ジョージ・エリオットは、まずアーサーの最も本質的な性

格をしつかり把握し、その上で彼の行動、心の動きを描いてゆく。アーサーの性格の核を成すものは、あらゆる苦痛・不快に耐えられず逃避してしまう弱さだ。彼の安易な樂觀主義、巧妙な自己弁護、責任感の欠如などはすべてこの弱さから生じてくる。アーサーの性格は、彼がヘティに誘惑を感じ、それに負けまいとする時にまず表面化してくるが、作者は自らの解説や中間話を駆使しながらアーサーの複雑な心の屈折をあざやかに分析してくれる。その解説は皮肉な響きを持つことはあっても、作者の感情を示すこととはない。例えば十二章でジョージ・エリオットは、アーサーのような若くてハンサムで、少々過つことがあってもそれを償うだけの財産を持った、気前のいい青年の心の内をあれこれ詮索することは馬鹿げていると、これからやろうとすることとは逆のことを言った後、軽い皮肉をこめながらアーサーの行末を暗示する。

我々男性は立派な家柄と財産を持った青年に対しては、おおざっぱで一般的な、紳士にふさわしい形容辞を使うものだ。そして女性はその際立った属性であること優れた直観によって、彼が「立派な」人間であることを見抜く。おそらく彼は誰の名を汚すこともな

く一生を過ごしてゆくことだろう。言わばどんな荒波も乗り越えられ、誰にも保険に入ることを拒絶されない船であった。しかし船は、静かな海の上ではけっして発見されることのない構造上の欠陥を恐ろしいほど浮き彫りにすることがある不慮の事故に遇いがちであることは確かだ。そしてこれまでも多くの「気のいい男達」が、いくつもの情況が大変不運な重なり方をしたために、同じように自分の欠陥を暴露してきたのだ。

このように作者は「気のいい」アーサーがやがて性格的な弱さを暴露することを暗示し、しかもそれが情況の不運な重なりでのせいであるかのような印象を与えようとする。アーサーはヘティに会うまいと決意し、イーグルデイルに同行こうとした矢先、愛馬メグが脚を痛めるといふ不慮の事故に遇う。止むなく彼は別の馬でガウエインの所へ行く。ところが、ヘティを避ける目的で出かけてきながら、彼女に会えそうな時間になると、突然馬を飛ばして帰ってくる。アーサーには不快な自己批判に耐えるだけの強さがないために、彼はヘティに会いたいという欲望を、彼女には会うまいという決意によって巧みに意識の下に追いやってしま

う。しかしこのアーサーの決意というのは曲者だ。なぜならそれは自己満足を得るための自己欺瞞に過ぎないからだ。したがって彼はその欲望が表面に現われると、心の中で安易な自己弁護を展開し、責任を自分以外のものに転嫁してしまふ。

昼食を済ませたアーサーが再び自分の化粧室に入つた時、心の中で午前中繰り広げられた論争が、一瞬、自分の脳裡をかすめるのを彼は防ぐことができなかった。しかし、今の彼にはそれを思い出してじっくり考えることはできなかった——午前中彼の心を支配していた感情や考えを思い出すことは、起きてすぐ窓を開けた時、さわやかな気分にしてくれた朝の空気の格別な香りを思い出そうとするようなものであった。ヘティに会いたいという欲望は、堰を越えてあふれ出た流れのように、突然彼の心に戻っていた。彼は自分を捉えているように思える、この取るに足らぬ気まぐれの激しさに我ながら驚いた。髪を解く手が震えてすらいた——フン、あんなに馬を飛ばしたせいだ。つまらない事をまるで重大事であるかのように真剣に考えたりするからだ。今日のところはヘティの顔を見て目の保

養をしておこう。それから何もかも忘れてしまおう。だいたいアーウィンがいけないんだ。「アーウィンが何も言わなければヘティのことなんか、メグの脚の怪我ほども気にとめたりしなかったんだ。」それにしても今日は『いおり』でごろごろするにはうってつけの日だなあ。あそこへ行つて夕食の時間までにムーア医師の「ゼリューゴ」<sup>(2)</sup>を読み終えてしまおうか。『いおり』は『もみの木立ち』の中にある——ヘティがホル農場から歩いてくる時、必ず通る所だ。つまりそれほど自然なことはないわけだ——ヘティに会う目的で行くんじゃなくて、歩いていたら偶然出会ってしまつたということになるんだ。(十二章)

アーサーはヘティに誘惑を感じる自分が、かなり危険な状態にあることを告白するつもりでアーウィン牧師を訪ずれる。結局彼は目的を果たすことなく帰って行くが、その過程の描写はアーサーの心の微妙な動きをリアスティックに伝える。彼はアーウィンに会つたとたん、それまではきわめて簡単だと思つていた告白という行為が、急に困難なことに思えてくる。同時に告白する決意は急速に力を失う。そういう自分を弁護するかのように、彼はヘティの誘

惑は所詮、大騒ぎするほどのことではないと思つてしまふ。それに他人の賞賛を好むアーサーの心の中では、事実を知られることによって自分に対するアーウィンの評価を下げたくない気持も働く。それでも彼はなんとか気を取り直して告白しようと思ふ。しかし作者は巧みな会話の展開によつてアーサーに告白の機会を与えない。二人は動機と結果に関する一般論を話し出すが、アーサーは「情況の重なり」を持ち出すことによつて告白への準備をしようとする。ところがアーウィンは、悪意があろうとなかろうと結果は冷酷であり、それに先行する様々な心の迷い、動揺とは一切関係を持たないことを強調する。

アーサーに残された最後の逃げ道が断たれる原因の一部がアーウィンにあることは確かだ。彼は一般論から突然、何か個人的な問題がからんでいるのかと尋ねることによつて、アーサーから告白する気持を完全に奪つてしまふ。また彼は、アーサーの告白したような様子に気付いていながら、他人の秘密に立ち入りたくない気持とアーサーなら大丈夫という買ひ被りから、結局彼を救えなくなる。アーウィンもまた結果の恐ろしさを身をもって知ることになる。しかし作者はその最大の原因は、アーサー自身の深層心理

の中に存在することを我々に教えてくれる。

この告白したくないというアーサーの奇妙な気持の下には、彼自身認めないような一種の秘密の影響力を持った動機が作用していたのだろうか。我々の心の中で起る事は国の政治とおおいに似たところがある。つまり困難な仕事の多くは表面に出ない力によってなされる。機械においても、小さな目立たないひとつの歯車が、いくつもの大きな目に付きやすい歯車の動きと密接に関連していることがしばしばあることと思う。多分、この瞬間、アーサーの心の中では彼にも分らないような力が働いていたのであろう——恐らくそれは、万一、自分の立派な決意を完全に実行できなかった場合、牧師に告白したという事実が、彼にとつてきわめて厄介な問題になりはしないかという恐れではないだろうか。私には、そうでないと断言することはできない。人間の心は大変複雑なものなのだ。(十六章)

このあとアーサーは、ずるずると泥沼にはまり込んで行くが、彼には罪悪感や良心の痛みはない。それから逃れるために安易な自己弁護を繰り返すからである。したがって彼

は自分の行為が持つ意味をすっかり認識することができない。『もみの木立ち』の中でヘティとのラブシーンをアダムに見つけられ、しかもアダムの口からヘティを愛していることを聞かされた時、アーサーは最後までアダムを欺し通そうとするだけである。この結果、彼は別れ話を記した手紙をヘティに書かなくてはならなくなるが、その時ですら彼にはヘティを傷つけることに対する責任の自覚はない。むしろ自分は根はいい人間なのだから、悪い結果が降りかかるに価しいと思ひ、不運な情況のためにこうなってしまうという被害者意識を持つ。そしてヘティに対しては、必ず将来十分に償いをしてやろうという決意を持つだけであり、良心の呵責は感じない。それどころか、自分の情事は彼女の利益になると思ひ込む。

まったく不運な出来事ではあるけど、あれこれ大袈裟に考えたり、起こりそうもない禍を心配したりして、事を実際以上に悪く考えるのは無益なことだ。ヘティの一时的な悲しみが最悪の結果なんだ。アーサーは不可避であることがはっきり示されない限り、悪い結果のすべてから断固、目をそらした。でも——でもヘティだって、もしこんなことにならなかつたら別の苦労



を味わっていたかも知れない。それに恐らくこの先、ヘティのために色々なことをしてやって、私のことで流す涙を十分に償うことができるだろう。ヘティは今悲しい思いをするお蔭で、将来私に面倒見てもらえるような、ありがたいことになるんだ。そう、禍転じて福となる、だ。物事はこんな風にうまくできてるんだ。(二十九章)

このようなアーサーの分析は、読者の心を捉えて離さない迫真性がある。ジョージ・エリオットは、あたかもレントゲン写真を見ながら病状の悪化を辿ってゆくかのように、アーサーの言動の裏に潜む深層心理をあざやかに分析し、彼の道徳的墮落を跡付けてゆく。前述の通り彼女はアーサーを支配している本質的な性格をしっかり把握しているために、彼の描写には一貫性があり、少しの矛盾も感じさせない。しかも作者は自分の感情を見せることがない。このことはアーサーの描写に緊張感を与える一因ともなっている。ジョージ・エリオットは「ギルフィル氏の恋物語」の中に、アンソニー・ワイブローウという人物を登場させていた。アーサーとアンソニーは異質の人間ではあるが、道徳的墮落を描く題材とされている点において共通す

る。しかしアンソニーはとてもアーサーとの比較の対象とはなり得ない。それほどアーサーの分析の方がはるかに優れているのである。このアーサーの描写だけを見ても、ジョージ・エリオットが短期間にどれほど顕著な手法上の進歩を見せているかを我々は知ることができる。

確かにジョージ・エリオットはダイナの扱いに失敗し、クライマックスでセンチメンタリズムを見せている。このことは「アダム・ビード」の大きな欠点ではある。しかし後者について言えば、彼女はそれ以前のアダムを实在感ある人物像にしており、しかもその後すぐに前の調子を取り戻しているために、主人公の共感への改宗という主題の展開は、けっして説得力を失うことはない。そしてホール農場のポイザー一家を中心とするヘイスロープの住人の生き生きとした描写は、その主題部を取り囲む外円の精神的風土をしっかりと読者に伝えているために、ヘティの悲劇がヘイスロープというひとつの社会全体を捲込んでゆく必然性も我々に伝わってくる。当然アダムの苦悩はその一部として描かれる。そしてアーサーは自分の行為がもたらす結果の恐ろしさを知らされる。いくら巧妙な自己弁護を繰り返しても、やがてネメシスの影は迫ってくるからである。こ

うしてジョージ・エリオットは人間の反道徳的行為が及ぼしてゆく影響を、個人のレベルと社会的レベルの両方において捉え、描いている。この作品が全体的によく統一されている所以である。

〔註〕

(1) 例えば *Letters*、II 卷四三九頁参照。

(2) この「馬上の旅人」には、はつきりスコットの影響が認められる。作者はこの旅人に様々な機能を果させている。

例えばアダムやダイナの理想化に一役買っているし、ヘイスロープの自然描写は彼の目を通してなされる。また『緑地』で行なわれるダイナの説教を聞きに集まったヘイスロープの住人は、「ドニソーン・アームズ」の亭主キャッソンと彼との会話によって紹介される。彼はダイナが独房にいるヘティを訪れる場面(四十五章)に治安判事として再登場するが、これは偶然にしては出来過ぎているという感を得られない。

(3) 左に掲げるアン・モズレイの評(*The Critical Heritage*, London, 一九七一、八八頁)を読む限り、当時ライドのような牧師が多かったし、彼らに対する反感も強かったことが窺える。そうなると作者はライドを単にアーウィンの引

き立て役にしただけではないとも考えられるが、我々にはライドはどう見ても作為的な人物としか映らない。

「この物語について二人の人が三分も語り合えば必ずや、ライド氏の説教方法の定義を、心の底で大きなよろこびを味わいながら引用するだろう。しかもそれが身近な牧師の説教にびったり当てはまるのだが、敬意、あるいは言いにくい気持からそれ以上言うことを憚るかのように、具体的な名前は掲げずに一般的な話題として扱うであろう。しかしその定義が各人の心にしみ込んで行くことに変わりはない。そしてこの次に冷酷で厳しい、論争調の説教を聞く時——恐らく今度の日曜日であろう——人はその滑稽さに、ポイザーの息子達が『説教の間、見つからないようにそっといじくる』つもりで教会に持っていたおはじきに見出したのと同じ心の安らぎを覚えるばかりか、以前は弁解の必要を感じていた嫌悪感に対し、今は理由を持っていることを感ずる。」

(4) *George Eliot: Her Mind and Her Art*, Cambridge, 一九六二、一〇六—一七頁。

(5) 晩年のアダムにアーウィンの思い出話をさせるという手法について、W・J・ハーヴェイは重要な意味を見出し、次のように述べている。

「我々は恐らくそれと気付かず(作中)人物の空想上のマイクロリズムと、ジョージ・エリオットと現実の世界というマクロリズムの間にある、ぼんやりした境界線を越えたのである。全知全能の作者は、その二つの世界をつなぐ橋、あるいは鎖の輪である。当然の権利として読者の前に姿を現わすことにより、その章〔十七章〕を書き始めるジョージ・エリオットは、自分を今は年老いて昔を思い出しているアダムの聞き手にするという単純な方法により、いつの間にか作中の人物になり代わっているのである。この手法の意味するところは、ジョージ・エリオットが手がけている種類のフィクションに対する我々の考え方にとって重要である。作者のぎこちない介入と思えるこの出だしは、語られている物語の『現実』の種類——読者はこの小説に對し、どのような種類の同意を求められているか——を確立することにおいて必要な機能を持っていると見ることができるだろう。」(*The Art of George Eliot*, London, 一九六三、七一頁)

めるアダムを見て、「きつとあの人は気性の悪い女の美しさなんか価値はないと思っているに違いない」と思うことにより、作者の言葉とは逆に、「物静かな」悪意を抱いていることを読者に印象づける(二十三章)。

(7) ハーヴェイもこの点に触れ、中心人物は余りにも大きな使命を負わされているためにジョージ・エリオットはその豊かなユーモアのセンスを彼らの中では発揮できず、中景に位置する二次的人物を通してそれを発揮しているという主旨のことを述べている(既出 一五六頁)。

(8) 例えばF・R・リーヴィスは、彼女を中心とする田舎の描写は、従来与えられてきた賞賛に十分価すると述べている(*The Great Tradition*, London, 一九四八、四八頁)。

しかしジェローム・テイルは、ミセス・ポイザーは少々酷使され気味であり、彼女やヘイスロープの村人が舞台に出すぎていると述べ、やや批判的である。(*The Novels of George Eliot*, New York and London, 一九五九、一六頁)

(9) ジョージ・エリオットは出版社のジョン・ブラックウッドに宛てた手紙の中で次のように述べている。

「エディンバラ・クラントに載った書評は(この作品を)心から楽しんだという調子で書かれております。私はその

筆者に大変好感を抱いたので、シゼス・ポイザーが初めて口にする言葉を、作者の記憶に残る諺と思ひ違ひしていることを残念に思います。私の記憶には諺のたくわえなどありませんし、私が新たに考えなかつたような言葉は一言もシゼス・ポイザーには言わせていません。」(Letters Ⅲ巻 二五頁)。

- (10) Barbara Hardy, *The Novels of George Eliot*, London, 一九六三、三三頁。
- (11) *Discussions of George Eliot*, Boston, 一九六〇、五頁。
- (12) 同書 九頁。
- (13) 既出 五〇頁。
- (14) *Early Victorian Novelists*, London, 一九三四 三三三—三四頁。
- (15) 既出 七八頁。
- (16) *Letters* Ⅱ巻五〇三頁。
- (17) 既出 一〇八頁。
- (18) *Letters* Ⅱ巻四四七頁。
- (19) *George Eliot*, New York and Toronto, 一九六四、一〇二頁。
- (20) *The Living Novel*, London, 一九六一、八三頁。
- (21) *George Eliot's Early Novels: The Limits of Realism*,

Berkeley and Los Angeles, 一九六八、一一六—一二七頁参照。

- (22) John Moore (1729—1802) スコットランド生れの医者、小説家、紀行文作家。「ゼリチーコ(Zelucio)」(1786)が最も有名な作品。